

オリーブの会通信

مجموعة الزيتون

2022年12月20日第25号 (通巻31号)
 オリーブの会
 大阪府豊能郡能勢町平通101-453
 tel/fax:072-737-9454
 mail: olivenokai_zeytun@yahoo.co.jp
 facebook:oribunokai

イスラエルの新政権の誕生は、パレスチナとの対立を激化させる Tionse



1. ネタニヤフ政権の立場、

首相に指名されたネタニヤフは、12月21日に期限延長の末組閣を終えた。しかし連立の顔触れは、宗教シオニスト、ユダヤの力、ユダヤ・トーラ連合、シャス、過激な反LGBT政党「ノアム」など、同じ右派でも、宗教右派が連立しており、その連立性質を物語るものになっている。非宗教右派は、ネタニヤフのリクードだけであり、連立内では、一番左、ないし中道である。

その意味で、パレスチナに対する新政権の立場は明確である。これまでも、オスロ合意を骨抜きにし、パレスチナの独立国家への道を閉ざしてきたし、オスロ合意そのものを否定している。そして、パレスチナの和平について以下のように発言している。

「ネタニヤフは、木曜日に米国のラジオネットワーク、ナショナルパブリックラジオに語った、パレスチナ人のための制限された自治を提案し、それがパレスチナ人の唯一の適用可能な平和と呼んでいます。

ネタニヤフ首相は、米国のラジオ局に対し、『唯一成立する平和は、我々が守ることができるものだ』と語った。『そして、我々が守ることができるものは、パレスチナ人が自らを統治するためのすべての権限を持ち、我々の生活を脅かす権限を持たないものである』。イスラエルの首相に指名されたベンジャミン・ネタニヤフが、パレスチナ人は主権を持たずに自治権を得ることができ

ると述べたと、中東モニターが報じた。」

ネタニヤフは、主権国家としてパレスチナを認めない立場をとっており、パレスチナ自治政府や、米欧諸国が2国解決方式を主張しようと、イスラエルは受け入れないことは明確である。しかし、明確であるのは、中道とみられているラピド、ガンツなども似たような立場であり、自治政府に期待するののパレスチナ人を抑えることであり、パレスチナ内でイスラエルの代理をすることではない。すなわち、これまでの支配が続けられることになる。ところが、宗教的シオニストたちは、パレスチナ人自身の存在をも否定する傾向があり、この政権においては、パレスチナの主権はおろか、存在そのものを抹殺される可能性がある。

組閣については、シャス等が譲ることで、極右宗教シオニストたちの希望の閣僚ポストを与えた。しかし、シャスの党首のアーリエ・デリは汚職で有罪判決を受けており、犯罪歴があっても、大臣になれるようにイスラエルの基本法を変える必要があった。また、ベン・グビエルが国内安全保障相になるにあたって、権限を拡大することをもとめており、それについても、クネセットで法律の改正が必要であった。もう一つの問題は、主要なポストを極右シオニストの分け与えたため、リクード内に不満が残りそれへの対処が必要であったためであった。

オリープの会通信 第25号(通巻31号)

この延長された組閣期間(17日間)、ネタニヤフ首相は、連立協定の実施を妨げる問題を解決するためにいくつかの議会の障害に対し、ネタニヤフ陣営が協定を実施できるように司法立法を議論する臨時委員会を形成するためにクネセットの新しいスピーカーを選出するプロセスを迅速化しなければならなかった。

ネタニヤフ首相はクネセットの新しい議長を選出することを決め、閣僚職の分配という難題を持ち越した上で、彼の側近の一人とされるヤリブ・レビン議員を一時的にその職に任命することを決めたという。連立協定の履行に必要な立法手続きの完了後まで、リクードの指導者を利用している。

リクードがパートナーと行っている連立交渉に詳しい関係者によると、政府樹立を発表する前に、ネタニヤフ首相は電光石火の立法手続きで法律を制定しようとする予定だ。その間に、「基本法」を改正し、汚職で有罪判決を受けたシャス党のアーリエ・デリ党首を大臣に任命できるようにする予定だ。

そしてもうひとつ、イタマル・ベン・グヴィール国家安全保障大臣の権限拡大に関する法律が制定されるが、これはかれが要求してネタニヤフ首相との間で合意されたものである。ネタニヤフ首相はまた、クネセットが制定した法律を取り消すことができないように、裁判所を回避するための法律も求めるだろう。

「ベン・グヴィール法」草案は、国家安全保障大臣に名前を変える国土安全保障大臣が警察政策を決定し、その監察官を大臣の指揮下に入れること、大臣が「警察の管理と運営」に責任を持ち、警察予算とそれを通じてその優先順位の承認に責任を持つことを要求している。

イスラエルのクネセット総会は14日夜、「ユダヤの力」党首で国家安全保障担当候補のイタマル・ベングヴィール氏と「宗教シオニズム」党首のベザルエル・スモトリッチ氏に幅広い権限を与える法案を多数決で承認した。

クネセットはまた、“宗教的シオニズム”を代表し、“占領地における(イスラエル)政府の活動の調整部門”を担当する教育省の大臣と治安省の大臣を任命するための前段階として、国防省内に2人の大臣の任命が可能になる法改正を承認した。

この法律は、入植地での建設の承認と拡大を容易にし、ヨルダン川西岸のエリアCのパレスチナ人村での建設を阻止することを目的としている。

ネタニヤフ首相の連立政権は、イスラエル最高裁を回避してその権限を縮小し、クネセットが制定した法律が違憲で基本法に反していても、それを取り消すことができ

ないようにすることを目的とした「克服条項」の成立を目指す予定である。

2. パレスチナの情況

イスラエルのこうしたより極右政権への変貌に対して、パレスチナ民衆の間では、ますます、平和的な解決、自治政府の正当性への批判が拡大し、ナブルスで新たに登場した武装勢力「アイリーン・アルアスワド(ライオンズ・デン)」への支持が強まっている。以下は、パレスチナで12月13日に公表された世論調査の結果である。「パレスチナ政策・調査研究センターが実施した世論調査の結果によると、2022年の最後の四半期は、西岸地区に集中しているハマスに有利な内部パワーバランスに限定的な変化が見られ、マハムード・アッバス大統領の人気は、特に西岸地区で数%ポイント低下していることが示された。

国民の70%以上が「ライオンズ・デン」のような武装旅団の結成を支持しており、パレスチナ当局がこうしたグループのメンバーを逮捕したり武装解除したりする権利があると答えたのは、パレスチナ人の10人に1人にすぎないと同センターは言う。

こうした展開の中で最も顕著なのは、第2次インティファダの終結以降、ヨルダン川西岸北部でイスラエル軍部隊がパレスチナの都市やキャンプを襲撃し、武装抵抗勢力や民間人を問わず多数の殉教者を出した際に、前例のない武装衝突が果たした役割であろう。このことが、ヨルダン川西岸地区が最も意識変化の激しい地域であることの本質的理由である。

パレスチナ内部については、アルジェ合意や宣言がファタハとハマスのパレスチナ和解につながると考える人は4分の1に過ぎず、和解の行方を悲観視する人の割合が7割を超えるという結果が出ている。

また、アッバス大統領が大統領府の下に司法高等評議会を設置することを決めたことについて、国民は否定的に捉えており、司法の強化を目指していると考えられる人は5人に1人に過ぎず、司法の独立性を弱めると考えている人の割合が7割以上に増えている。

今期は、2国家解決策への支持率が大幅に低下し、入植地の拡大により、この解決策はもはや現実的ではない、あるいは可能ではないと考える割合が大幅に上昇していることが示された。しかし、この変化は、パレスチナ人

とイスラエル・ユダヤ人が同等の権利を持つ一国家解決策への支持率の上昇を伴わない。それどころか、この解決策への支持も減少していることが示された。

これらの結果は、イスラエルとの和解に対する意識の変化が、政治的解決に対する民衆の意識の硬化を反映していることを示しており、それは、ヨルダン川西岸において、武装インティファダへの回帰を支持する割合が大幅に増加し、過半数がそれを支持していることに表れている。

3. こうしたことから、わかるのは、中東和平は遠く、パレスチナの解放も遠いということだ。

イスラエル世論は、選挙結果からもわかるように、世俗シオニストがこれまで以上に後退し、オスロ合意のイスラエル側の当事者たちは、その支持を失っている。過激シオニストが支持を得る状況になっており、2国家解決方式そのものの可能性がなくなっている。自治政府が期待するような欧米による圧力は、これまででもシオニストたちを動かさなかったように、今後もシオニストを

動かすことはできない。

パレスチナにとっては、国際政治の動きに依存するのではなく、自力での解放の道を作り出していくしないし、パレスチナの民衆もそれを自覚していることが世論調査の結果にもあらわれている。

その大前提がパレスチナの民族的統一の確立であるが、アルジェリアでの合意にも関わらず、これまでと同じ、履行されないままに終わる可能性が高い。自治政府、ファタハが明確に、オスロ合意を放棄し、イスラエルとの治安共同を放棄しない限り困難である。

パレスチナ含めて、米国の中東への関与が弱まる中で、それに代わる大国として、中国が登場しており、サウジを含めて、アラブ諸国が中国の影響力に期待をかけることになっている。

米国は、アラブ諸国とイスラエルの正常化によって、反イラン同盟によって、影響力を維持しようとしてきたが、サウジなどと石油減産の拒否によって、関係は冷え込んでいる。それが中国への米国に変わるものとして期待が大きくなっている。それはパレスチナも例外でない。



投稿日：2022年12月13日 | 09:44 (PFLPのHPより)

イスラエルは、過去何十年にもわたってその支配の世俗的な粉で隠そうとした。このすべての透明性を私たちに見せるために、これらの選挙を必要としたので、最近の選挙は、率直に言って、宗教に基礎を置き、世俗的な木の脚で運ばれた国家のルーツに戻るものであり、それで時間の距離を移動したが、それを長く運ぶために継続できなかったのである。最後の世紀の40年代の状態の形成以来、それらの起源の静かな歴史的背景を読まなかった人々にショックを与えることに。ベン-グリオンは、彼は宗教の伝統を遵守することを約束したアグダト・

イスラエルとの取引でそれをあえて発表したのみである。それゆえ世俗主義は宗教と強制結婚を発明しようとした。しかし最終的には宗教勢力が世俗主義に勝利した。彼らは、その基盤がユダヤ教とその書物に基づいている国家に住もうとした。

ラビがイスラエルを支配している。ヘルツルが生きていたら、ショックを受けただろう。彼は著書『ユダヤ人のための国家』の中で、ラビをシナゴークに隔離し、政治への干渉を防ぐ必要性を断言した人だ。政権形成の過程では、宗教シオニズムのラビ、シャス党のラビ、統一トラー・ユダヤ主義のラビが最大の役割を果たし、その中心になっているようである。いずれも、ラビの勅令

に従って、大まかなラインと条件を決めている人たちだ。

“中東の世俗国家イスラエル”という言葉は、終焉を迎えつつある。それを海外に投げ出したメレツと、世俗的なビジョンにしたがってそれを設計した労働党など世俗政党を打倒した前回の選挙によって、剥奪されたのだ。聖職者とその政党は、4つのうち3つ召集した。誰が次のネタニヤフ政権を形成するか、聖職者の一部は、省庁のオフィスに立ち、それらの背後に偉大な宗教の文献あり、テキストによって国家を実行することになります。

“イスラエルは独裁の海に浮かぶ民主国家である”その言葉は、前回の結果で叩かれた。連合のメンバーの発言と他の人々、アラブ人だけでなく、異なるユダヤ人に対する抑制できない人種差別の程度をもつ人は誰であろうと、イスラエルが地域で比類のない墮落に向かっていくことになる。おそらく中東の独裁は宗教独裁ではなく、これはあまり深刻ですが、イスラエルでは、暗い時代に遡る遺産から派生した彼らの判断は、聖職者の独裁を作ることになる。

今回のイスラエルでは、信仰が政治に勝利し、宗教国家が「世俗国家」に勝利し、国家が設立された際の考慮事項が消滅してしまったのである。世俗的な国家、法律、透明性といった配慮は、イスラエルの有権者が歴史のゴミ箱に捨てるほど、重要なものではなくなったのだ。数年前までは、汚職の疑い一つで、イスラエルの政治家の未来は潰えたが、イスラエルは、この選挙で、賄賂から背任まで扱う裁判所が扱う疑惑とファイルによって追求されている人への信頼を回復するために、投票箱に殺到

したのである。それだけでなく、この政府の最も強力な男性は、世俗的な国家の基準に似て、より良い状態では、有権者の気分と優先順位は、彼は法律と信頼の状態ではなく、汚職の状態に向かって決めたことを反映していないです。シャス派のリーダーであるアーリエ・デリ氏は、20年前、内務大臣時代に窃盗と横領の容疑でメシアフ刑務所に逮捕されたが、最悪のことに、彼はまた同じことをしたのだ。

社会的、政治的な物事や構造は、ボロホフ階層によって、統合されており、大衆と社会の気分の深さから来るこの組み合わせは、上部政治クラスと1階を停止することはできません。宗教は、原始的な国家を生み出すだけだろう。このことは、私たちがすぐにこれを目撃することを意味するものではない。私は、この道筋に言及するたびに、「木製の脚がまだ残っているので、時間がかかるだろう」と言うことを怠らない。

今回の選挙は、国家の歴史において画期的な出来事でした。私たちは、法律、制度、入植地、軍隊など、その形態と内容に影響を与える大規模な変化に直面している。彼らの真似をしたいという願望を持っていた近代的な性格の超大国の力を借りて、その起源を隠したり、覆ったりしようとしたイスラエルに幕が下り、が、今政府の指導者の一人が出した最初の声明：これらの国はイスラエルの問題への干渉をやめるべきだということ、それはこれらの国の仲間として育てられた国にとって大きな意味を持つでしょう。選挙で新しい形式が明らかになったので、その実践を見てみましょう。



投稿：2022年12月13日 | 09:43 (PFLPのHPより)

おそらく、シオニスト主体のネオ・ファシストの台頭が「イスラエルの民主主義」の歩みを後退させるものであると主張するのは、素朴さ、自己欺瞞などであり、「イスラエル」の本質とその政治エリートの本質を正確かつ包括的に分析しているからこそ、「民主主義」であると

いうその状態そのものが原因なのです。というのも、「イスラエル」の性質とその政治的エリートの性質を正確かつ包括的に分析し、政治舞台におけるこれらのエリートの間を交換する方法は、すでに証明されているように、この上昇は、ユダヤ人国家シオニストプロジェクトにおける長い独自の文脈上の単なる多様化に過ぎないということを疑う余地もなく言及しているからです。ジャボチ

ンスキーは、必要なときにワイズマンを排除し、時計が止まったときに彼らをも復活させた。1977年の仕事、その後のシュテルン一味の犯罪者たち、そしてまた仕事、ラビンやシャロンと、シオニズムにおけるあらゆる見かけ上の逸脱が、実際には修正主義的プロセスであることを証明する長い経過の中で、このようなことが起こったのだ。こうしてカハニズムは、恥じることなく、「イスラエル」政治の空でファシストの太陽のように輝きを取り戻すのである。

この文章は、シオニズムにおける新しい、あるいは修正的な変革の自然な代表者であるイタマール・ベン・グヴィールとその問題構成員に焦点を当てている（ベン・グヴィールとその現象を扱ったシオニスト新聞にある多くの記事に依拠したものである）。

10月初旬、チャンネル2の風刺テレビ番組『Eretz Nehederet』は、目を膨らませた過激派シオニスト政治家イタマール・ベン・グヴィールを連続殺人犯の漫画のキャラクターとして描いている。実際、この種の風刺は、皮肉にもこのファシストの危険性を過小評価しているとはいえず、彼にふさわしいものである。まさに、ハラムの虐殺犯のような大量殺人犯の粗野な支持者として、彼の写真を居間に、自宅に飾っていたのだから。おそらく心理学者が議論するに値する質問は、大量殺人犯の写真を自宅に飾る人が享受する精神的正常さの程度はどの程度なのか、ということだろう。この質問自体が、常に銃を撃つ準備ができていた武装した入植者である場合には、意味をなさない。自分の妻でさえ、連合の妻たちの会合に拳銃を持って行くとき、この恐ろしい、苦い皮肉に満ちた象徴で表わされているのだ。この状況について、ある友人は、「どれほど危険か サラ・ネタニヤフの家でベン・グヴィールの妻は何を感じているのだろうか？

ベン・グヴィールを非常識、サイコパスと見る人もいるが、実際には、少なくともファシストの約束を果たす能力に関係なく、彼の発言や宣言的な行動で、恐ろしい犯罪者のように錯乱しているのである。上記のシットコムは、予期しない奇妙な贈り物を冠したサンタクロース（イスラエル）として、熱狂的に燃える狂人としてベン Gvir を描いた、彼はすぐに参加した大臣の位置のための彼の憧れを発表し、ステージを下るように人種差別主義者がひねりと回転、またはショーで彼の文字を模した俳優として。あるいは、メイル・カハネのカツハ党の黒い拳が背後に迫る中、若いユダヤ人過激派の一団が息の合ったダンスを披露している。オツマ・イエフデイト、

そして漠然と「ユダヤ人の力」と訳されるベン・グヴィール党は、「コル・ハミシュパシャの司祭」、つまり家族全員のための司祭職となるのである。

ルート

1990年、まだ10代前半だったベン・グヴィール(46歳)。アメリカ生まれのラビで元クネセト議員の過激派カハネの暗殺があった。彼は、パレスチナ・アラブ人の追放を直接主張し、それが「エレス・イシェル」に対するユダヤ人の完全主権の回復と神殿の再建、そしてユダヤ人の最後の救済に必要なステップであると信じていたのである。当時、第一次インティファダにおけるパレスチナ人の暴力に対する怒りから、ベン・グヴィールは1990年代半ばにカチ党とヘイ・カハネ党の青年部で活動するようになったが、両党はアラブ人の追放を求め、暴力的過激派と親密であることから最終的に禁止された。ベン・グヴィールは、カツハの指導者でカーハネの元友人であるバルーク・マルツェルに10代で世話になり、最高裁から2019年のクネセトへの出馬を禁じられた。

非公式には、オツマ・イエフダは、過去25年間に交代で登場したカツハの後継者の中で最も著名であると自らを紹介し、約束された純粋な右翼政権のためのベンヤミン・ネタニヤフの同盟を完成させるために、つまらないが必要な栄養剤であることからその力を引き出しているのだ。そしてこれは、党がネタニヤフに、国内安全保障のような豪華な閣僚の地位と引き換えに提供するものである。こうしてネタニヤフは、司法責任から彼を守るための連合と票と引き換えに、彼が基本的に軽蔑する（彼らのファシズムではなく、他の理由で）一握りのファシストに政権を渡すのである。

前述の風刺番組『Ard Eretz Neheder』はこのエピソードで、ベン・グヴィールの犯罪意図と能力について言及している。彼がガスボンベを持って踊るとき、彼の物まね芸人が幼子を抱く父親のようにガスボンベを果てしない幸福感で見つめながら嬉しそうに踊るが、これはパレスチナ人のデュマ村の犯罪についても曖昧で間違いなく直接言及しているのである。2015年、ダワブシャー家が暗殺された事件*で、ベン・グヴィールがその犯罪を犯したテロリスト入植者の弁護人であったことも想起される中で。

*2015年にユダヤ人テロリストによって、良心とに18カ月の息子も殺害し、5歳の息子だけが生き残った。近年最も残忍なユダヤ人によるテロ

オリーブの会通信 第25号(通巻31号)

偏りの修正。元のプロジェクトに固執する

平均的な「イスラエル人」は、占領、パレスチナ人、入植者から離れて安全な夜を過ごす前に、カハネ（カッハの創設者）、ゴールドスタイン（神殿山の虐殺者）、イガル・アミル（ラビン殺害者）、ドゥマ村の殺人者たちはみな、ベングヴィールと同様にモンスターだと自分に言い聞かせようとするのである。余所から来た、「イスラエル」の文脈では「オリジナル」ではない、この“普通”によって長い間神聖化されてきた国家の否定から来るものである。ベンジャミン・ネタニヤフ、ナフタリ・ベネット、ロボット女アイレット・シェイクなど、右派の中心人物に代表されるいつもの優しい右派とは異なるモンスターたちだが、現実はこれに衝撃を与える。平均的なイスラエル人、そのベン・グヴィールは、クローゼットの中の怪物ではなく、リビングルームの中の友人なのだ。武装し、キツパをかぶった入植者が約束の地で大暴れしている姿に代表される、本当の「イスラエル」の主演であり、おそらく最も強固な表現者なのである。

ベン・グヴィールは、パレスチナにおけるシオニストの入植プロジェクトの主要な代表として、このユダヤ人の国家プロジェクトには何かが壊れており、それを修復するための極端な措置が必要であると考えている。彼こそ、このプロジェクトの車輪を改革し、前進させる鍵を握っている人物である。グヴィールは一般のイスラエル人の憧れの的である。彼らはカハネを愛したことも賞賛したこともなく、ベン・グヴィールの住むヨルダン川西岸奥地のキリヤット・アルバには移住どころか、行こうともしないのである。このことは、実体における国民的合意の瞬間の方向を示している。それは、決して「新しい」瞬間ではなく、シオニスト思想の本来の歴史的な文脈とその傲慢な人種差別的な本質に由来するものである。

ベン・グヴィールの信奉者は誰なのか。

厳密には、ベン・グヴィールはオツマが主要政党であったジョイント・リストの2番手であり、かつてのライバル、ベズエル・スモトリッチはイスラエルのカハニズムのより神学的なアシュケナーズ派を代表する人物で、1番手を譲っている。スモトリッチは、多様でほとんどが世俗的な有権者にとっては「オリジナル」なラビのように見える。一方、中流階級で無宗教のイラク人家庭の出身で、西岸ではないメヴァセレット・シオンで育ったベン・グヴィールは、愚痴っぽいタクシードライバー、あるいはは

重い客に見える。影が薄い。しかし、彼に希望を託した人々には、予言者がよく見せるような誇大妄想狂や宗教的狂信者には見えませんでした。そしてベン・グヴィールは、より明るく、よりリラックスした、「イスラエル人」としての姿を提示する。

ファシズムの場合と同様に、カハニズムの思想は悲観主義を滲ませる。したがって、最も爆撃を受けたステロットを含め、いたるところで入植地の建設が行われ、「イスラエル」の勝利を示唆する、その一般形態において楽観主義を鼓舞するこの矛盾した瞬間に、右翼の破壊者が台頭するのは理にかなっているといえるだろう。少なくとも当面は、ヨルダン川西岸で最近負けそうになっている場所でさえも。しかし、ベン・グヴィールと彼の有権者は、自分たちの生活状況をもとに悲観論を展開し、楽観論者は間違っていると判断する。「イスラエル」は勝っておらず、まだ危険な状態にある。ヒズボラは、モディーンでもどこでも、100万ドルの価値がある家をいくらでも破壊できるミサイルを保有しているのだから。ほとんど別の、彼の有権者が全く買うことができない家である。それは、イランが核爆弾を取得するのを防ぐために30年間続いたシオニストの努力は、その失敗した終了に非常に近いかもしれません。

にもかかわらず、ベン・グヴィールとその有権者はイランのことをあまり気にしていない。彼らは、イスラム共和国よりもパレスチナの方が脅威で危険だと考えているからだ。「イランはここにいないから」、イランのフォルドウ核施設は遠くにあり、西岸地区のトゥカルムの街にはためくパレスチナの巨大旗は、道路番号6からはっきりと見ることができるのである。6号線は、“イスラエル”という重要な動脈がより近くにあり、今、パレスチナ人の抵抗の大波が押し寄せているところだが、その主演は占領に怒り、以前の蜂起に参加しなかった占領軍に属する若者たちで、パレスチナ人-シオニスト紛争の新しい時代を予見している。“イスラエル”、それは2021年のエスカレーションの際、1948年に占領されたパレスチナの境界線内にある。

その中で、ベン・グヴィールは土地の支配に頭を悩ませており、以前のインタビューで“我々は2000年ぶりに祖国に戻ってきたが、まだ客人のような気分だ”と語っている。したがって、彼が手に入れた国内安全保障省は（おそらく）「統治」と個人の安全を意味し、それは何がそれを「国内テロ」の概念の枠内に置き、彼の選

拳宣伝が言ったことによれば、「この所有者は誰か」を示す必要がある、パレスチナ人とユダヤ人、どちらがこの国を所有しているか？ 1984年の選挙で、パレスチナ人労働者の存在による労働市場の構成の変化によって経済的影響を受けるミズラヒムを利用するために「ヘブライ人労働」という概念を用いた彼の精神的師匠カハネのように、ベン・グヴィールもまた、社会、階級、民族、地理的に異なる側面を持つ問題をとらえ、彼が推進しようとする人種主義者の枠組みのために利用することに成功したのである。

ここでのポイントは、ヨルダン川と地中海の間の全地域を支配することであり、それは「イスラエル」が欲望と強欲の間で、そして安全保障の必要性を主張し、国際的障害とパレスチナの挑戦の壁の間で直面しているジレ

ンマなのである。

こうしたことから、ベン・グヴィールは投票用紙の中で最も目立つ人物であり、テルアビブに住む「普通のイスラエル人」が考えていること、言わないこと、誰かに代弁してほしいことを本質的に語っているおそらく唯一の人物であるといえるだろう。まるで、ベン・グヴィールはここで、アシュケナーズの汚い行いを実行するために装着された手袋と化し、それが自分の仕事だと信じているかのようであり、実際に自分の仕事だとすれば、彼の有権者がそこから利益を得るかどうかは全く疑わしいままであり、おそらく彼らの運命は、1977年にベギン氏を選出し、狂人に背を向けた東方ユダヤ人の運命と同じものになるのであろう。本物のアシュケナーズ・リカードの利益として



投稿：2022年12月12日 | 09:56 (PFLPのHPより)

1970年頃、大陸横断的な企業が「緑の革命」について語り始め、この「高貴なスローガン」を使って、豊かな国の農業を支配し始めた。そして、2000年以降、これらの企業は貧しい国々の肥沃な土地を奪い始めた。また、オークランド研究所が2020年に発表した研究によると、一部の企業は、貧しい国の農民や市民を犠牲にして、慈善活動の名目で、彼らの利益を増幅するために多国籍機関や非政府組織を設立し、それらを支援しています。

アメリカの大富豪ビル・ゲイツは、アフリカにおける「緑の革命」の主要な推進者の一人と考えられており、アフリカの食糧および農業問題は、技術革新、特に遺伝子組み換え生物と化学肥料によってのみ解決できると宣言する一人である。農民運動の多くのメンバーが有機農業に賛成するようになった。彼らは土地と種子の民営化

と農業と工業肥料への依存を組み合わせたこの誤った解決策に反対する運動をしています。農業運動同盟、アフリカ市民運動といくつかの国際組織が2022年11月10日に発表した文章によると、農業に関する二つの相反するビジョンの矛盾が確認されています。そのうちの一つは、巨大な金融投資による利益を目的とし、もう一つは食料主権を達成することを目的としています。

ビル・ゲイツはその巨万の富をもとに2000年に「ビル&メリンダ・ゲイツ財団」を設立し、アフリカの農業分野でその影響力を急速に拡大させた。ビル・ゲイツは、新技術、種子、合成肥料の使用に投資することで、農業の生産性を高め、飢餓問題を解決したいと主張し、2006年に「アフリカ緑の革命のための同盟」(AGRA)のプロジェクトを立ち上げました。第二次世界大戦後、「緑の革命」の名のもとにアジアや南米を略奪したロックフェラー財団と提携し、アメリカの2つの機関は、農業のことを何

オリーブの会通信 第25号(通巻31号)

も知らない金融経営やビジネスの世界から来た評議員や経営者を採用し、2006年から「寄付者」の同盟を設立しました。ゲイツ財団、ロックフェラー財団、IKEA、USAID、イギリス、ドイツ、スイスの政府などです。

これら(機関や政府)はすべて「欧米」であり、2006年から2021年の間に、彼が現会長を務める「アフリカ緑の革命のための同盟(AGRA)」が受け取った2021年国連食糧システムサミットのための国連事務総長特使が受け取った額は、1.2億ドル以上にのぼる。その3分の2はビル・ゲイツ財団から、残りはネスレなどの多国籍農業企業や、ザッツ・シンジェンタやバイエルといった世界で最も重要な農薬会社からで、ヨーロッパでは禁止されているが、アフリカを含む世界の他の国や地域で販売されている有毒タイプの農薬を生産する2大企業であった。この連合は、人口の約70%を農業で生計を立てているアフリカ諸国に対し、ハイブリッドや遺伝子組み換え(GMO)の種子を使用するよう働きかけています。農薬や化学肥料の使用、農民が生産し交換する種子や「クローン再生産」可能な種子を永久に排除し、(2021年には)アフリカに植えられる種子の80%から90%をまだ占めていることを、(USAidがやっていることに似せて)訴えています。

アグラ・イニシアティブは、国家元首、閣僚、ビジネスリーダー、アフリカ連合、世界銀行、食糧農業機関(FAO)、多国籍企業、アメリカのコンサルティング会社マッキンゼーが参加する「アフリカ緑の革命フォーラム」を毎年3日間にわたり開催しています。

AGRAの創設者と指導者は、アフリカ11カ国の農民をだまして、合成種子、農薬、肥料を使わせ、「15年以内に生産量、収穫高、収入を2倍にする…」と言わしめたのです。彼らは飢餓を50%以上減らすと政府に約束した。しかし、このプロジェクトは工業用肥料や特許取得済みの種子などの市場を発展させるだけだった。

アフリカにおける緑の革命のための同盟-AGRAは、アフリカにおける食料主権同盟(AFSA)やアフリカ50カ国の農民や市民社会組織と未だに対立している。2021年、多くの農民・農民組織がAGRAとその資金提供者に対し、「アフリカの地域社会や農民に化学薬品や工業的農業を押し付けることをやめよ...なぜならAGRAは決して小規模農家の状況改善を目指しておらず、作物と農家の所得向上、地元生産による食糧確保、飢餓軽減などの約束を果たしていないのだから」と呼びかけるキャンペーン

を開始しました。むしろ、「アグラ」プロジェクトの実施は、2022年9月7日にASFAアライアンスのメンバーである南部アフリカ教団環境研究所(SAFCEI)が発表した調査結果によると、アフリカの飢餓の増加と並行して、多国籍肥料会社が記録的利益を得て豊かになっていることが明らかになりました。

ゲイツ財団とロックフェラー財団のプロジェクトの実施により、小規模農家が(地方政府と共謀して)貯蓄を失い、しばしば大きなリターンをもたらさない遺伝子組み換え種子や化学肥料の高値を支払うために借金をし、これらのプロジェクトの実施により、キビソルガムやさつまいもなど栄養価が高く気候に強い多くの作物が絶滅したことが、2020年から2022年の初めまでに発表された多くの調査により確認されているのです。AGRAは、生産性の向上という点ではわずかな成果しか得られなかっただけでなく、作物の多様性の低下や、農薬の使用という点でも悪影響を及ぼしたことが、研究所や大学によって確認されています。アフリカ政府は、作物と生産性を高めるはずの化学肥料や商用種子の購入に多額の補助金を出している一方で、農薬の集中使用は土壌を劣化させ、地元で栄養価の高い、気候に強い作物の生産を減らし、当該国の食糧不安を31%増加させているのです。

億万長者のビル・ゲイツが提案する「人道的目標」を装った商業目標と利益最大化の追求が、アフリカの農業分野を支配することになった。「ドル-アフリカで」と、世界銀行の一部門で工業的農業を支援しているアフリカ開発銀行(AfDB)のトップによる2021年11月の声明によると、このように述べた。

アフリカ(および世界の他の地域)の農民や協会は、気候変動に強い種子は存在し、農民によって開発され、非公式の種子市場を通じて取引されており、AGRA構想は土地、種子、資源、作物の民営化、独占企業の支配、そして格差の拡大、健康な食品の入手の困難化につながっただけだ・・・と宣言しているのです。

アジア、アフリカ、南米の農家が、歴史的な経験と現実から革新的な解決策を提案します。アグロエコロジー(有機)農業は、種子、農薬、合成肥料に代わる最良の方法であり、環境の保全を可能にし、土壌の破壊と貧困化、農民と消費者の健康への危機を回避することができます。なぜなら、農業は消費者と地域市場の食料需要を満たし、地形に適応した多様な食用作物を生産し、農

民の適切な生活を確保しなければならないからです。アグロエコロジーは、生産者、消費者、地元選出のリーダー、非政府組織（市民社会）、地元および国際研究機関のネットワークにより、農民を支援・訓練して専門知識と生産

物を強化することに依存しています。アグロエコロジーは、食糧への権利に関する国連特別報告者によると、農業分野の未来を象徴しています。



投稿：2022年12月07日 | 11:22 (PFLPのHPより)

コロナ流行を理由に3年ぶりようやくアルジェリアでアラブ・サミットが開催されたが、その間、地域サミットや国際サミットは仮説の中で開催され、特に100万人の殉教者の国で開催されることから、パレスチナの大義とアラブ問題に最も熱心なこのサミットを楽観視する向きもあったようだ。その最たるものがシリアとイエメンの問題である。しかし、さまざまな争点におけるその決定は、これまで言われてきたように融和的な決定ではなく、むしろ広報的な決定であり、飢えを肥やすことも満たすこともなく、これらの問題のいずれもシオニスト、アメリカ、反動主義者の目標から離れた解決への道筋をつけるものでもないのである。

パレスチナ問題に関して、アルジェリア大統領とアルジェリア外交は、20年以上にわたって疎外と清算の試みにさらされてきたパレスチナの大義に対する敬意を回復するために、アルジェリアでパレスチナ統一会議を開催し、パレスチナの分裂を終わらせパレスチナ人の故郷を手配するための真剣な試みを行ったと述べている。

確かに、パレスチナ統一会議が出した決定は、抵抗プロジェクトとオスロ清算プロジェクトとの矛盾とその反動に照らして、また、ファタハ運動が自治政府の政党として、1993年から現在に至るまで自治政府の政治手法の批判的見直しを行わなかったために、実行不可能な広報決定ではあるが、これらの決定 アルジェリア大統領はそれを巧みに利用して、パレスチナ分裂を口実にしたパレスチナ大義の議論を一切否定するアラブ諸国、特に報道機関を防止したのであった。

パレスチナ問題をめぐる首脳決議のバランス

パレスチナ問題に関する首脳会談の決議を注意深く読むと、次のようなことに気がつく。

パレスチナ問題の中心性...しかし!?

アルジェ・サミットは、アルジェリア外交を通じて、“パレスチナ問題の中心性を強調し、自由と自決の権利を含むパレスチナ人の不可侵の権利への絶対的支持”を規定した最初の決議によって、パレスチナ問題をアラブ国家の中心課題として理論政治文脈での考察を復活させたことを記録している。運命と、1948年の国連総会決議第194号に基づき、東エルサレムを首都とする1967年6月4日の線上の独立した完全主権国家パレスチナの具体化、パレスチナ難民の帰還と補償の権利の実現。

しかし、この決定は、以前のアラブ首脳会談で採択されたPLOの伝統的な政治プログラムへの配慮を回復するが、次の(第一)2国家解決を提案する新しい国家と革命的な力の多くの侵犯とオスロ合意の彼らの絶対的拒絶とアプローチで表される、悲惨な交渉。とその存在闘争としての紛争を振り出しに戻したこと(第二に)シオニスト団体がアメリカ政権の支援を得て独立したパレスチナ国家を樹立することを拒否したこと、この拒否は共和党であれ民主党であれ、アメリカ政権に等しいものであること。

それゆえ、アルジェリアでの首脳会議でこの公式を繰り返しても何の価値もなく、それはアラブ首脳会議の決定の空白を埋めるために用意された公式となった。言う

オリープの会通信 第25号(通巻31号)

までもなく、基本的な抵抗派と新しい革命的前衛が、シオニスト敵に対する武装抵抗のレベルに大きな違いを生み出していることを考慮していないのである。ライオンズ・デン」やヨルダン川西岸の各都市にある抵抗旅団は、現在、その背後にある国家解体を考慮し、パレスチナ国家領土全体の解放を強調している。

アラブ和平構想はアブラハム合意による国交正常化のためのメカニズムである

アラブ和平イニシアチブに関連する2つ目の決議については、以下の文面に従って述べられている。2002年のアラブ和平イニシアチブをそのすべての要素と優先順位とともに支持し、シリア・ゴラン、シェバア農場、レバノン・クファール・シュバ丘を含むすべてのアラブの土地に対するイスラエルの占領を終わらせ、平和のための土地という原則、国際法、関連の国際正当性決議に基づき、アラブとイスラエルの紛争を解決する戦略的選択肢として、公正で包括的な平和への我々の取り組みを確約すること」。

エルサレムへの懸念とされるもの

決議(3)については、「占領されたエルサレムとその聖地を保護することを目的とした努力と試みを継続する必要性について語り、その人口構成、アラブとイスラムのアイデンティティ、その歴史的・法的地位を変更しようとする占領の試みに直面してそれを守り、聖地を守るための歴史的ヨルダン王家の守護権を支持し、ユダヤ人化からそれを守るエルサレム委員会の役割に重点を置いている・・・」というものであった。などなど。この項目は、いくつかの検討事項のために、最も顕著に偽善と嘘の高さを反映している、。

1- アラブ諸国の大多数は、エルサレムの人々とその教育、経済、社会機関の不動のために財政的支援を提供することを規定した、過去のサミットの決定を実行しなかった。

2- エルサレム支援に関する首脳会議の決定は、占領軍がその人口構成とアラブ・イスラームのアイデンティティを変えようとしている中で、アラブ諸国がその人々の確固とした生活を支援するための特定の財政的義務を負うものではなかったという事実による。

3- ドナルド・トランプ前米大統領政権が主催したバーレーン経済会議(2019年6月25~26日)に参加したアブラハム正常化諸国などは、「世紀の取引」プロジェクトの経済平和への財政支援を目的に、エルサレムを2分割して考える取引を実質的に承認するものである。シオニスト主体の首都であり、2021年1月(1月)の取引発表式にUAEとバーレーンの外相が出席したのは、その表れなのかもしれない。

4- サミットでエルサレム救済委員会の支援について語られたことは注目に値するが、この委員会を率いるモロッコ国王は、エルサレムをユダヤ人化から救う役割を設立以来何ら果たしておらず、イスラム会議機構の決定の履行をフォローしていないことはよく知られていることである。絶対に、シオニスト組織と国交正常化条約を結び、安全保障協定を結ぶ者は、最初の分析では、エルサレムの大義とパレスチナの大義に対する最後の裏切り者ではないとしている。

ガザ地区への配慮とされるもの

ガザ地区に対するイスラエルの封鎖を解除し、占領軍によるパレスチナ人に対する武力行使を非難する要求に関する第4の決定については、ガザ地区の封鎖も公式なものであり、イスラエルの封鎖に劣らず危険であることを考えると、苦々しい皮肉であるが、アラブの体制における結びつきのほとんどが、同地区に対する一連の攻撃的戦争に対して形式的にもいかなる立場にも立たなかったことは、言うまでもないことである。むしろ、特にサイフ・アルクードの戦いで、レジスタンスの敗北を願った者もあり、この戦いで、レジスタンスが拠り所としていたイスラエルが敗北したため、これらのアラブを困らせた。

この決議の残りの部分である、暗殺や恣意的な逮捕を含むあらゆる野蛮な行為の非難、すべての囚人や抑留者の解放要求、国連への正式加盟を目指すパレスチナ国の支援に関する決定については、苦しむパレスチナ人とその国民的権利に関する多くのアラブ諸国の立場と矛盾する構造的性質の記事であるといえるだろう。

結論 パレスチナ側のサミットの決定を読むと、サミットは、占領と入植に反対し、エルサレムのユダヤ人化に反対するパレスチナの不屈の闘いを支援するために、

アラブの公式政権にいかなる経済的課題もコストも課さず、理論的にパレスチナ問題をアラブ国家の中心課題として考え直したことがわかる。

パレスチナ日誌

9月15日

- ・ヤバド近くのドタン検問所で銃撃
- ・国連、イスラエルの襲撃は、シリアでの援助の引き渡しを妨害
- ・カフル・ダンで、占領軍の銃撃で殉教者
- ・占領軍は、西岸で12人の市民を逮捕した。
- ・占領軍はヘブロンで、3人の子供を拘束し、2人の労働者を逮捕した。

9月16日

- ・ジェニンで占領軍は4人の市民を逮捕した。
- ・占領軍は、ナブルス県の市民たちを逮捕した。
- ・占領軍は、救急隊員を攻撃した。ベタの衝突で、4人が負傷。
- ・カフル・カッダムの行進の弾圧で、9人が金属弾で負傷した。
- ・ベイト・ウマルの衝突で、ゴム被弾で負傷と窒息
- ・占領軍は、シリワドの2人の青年を逮捕した。
- ・ベイト・ウマルでの負傷者と逮捕者
- ・占領軍はヘブロンで子供を逮捕
- ・占領軍は、バブ・アル・アモウドエリアで2人の青年を逮捕。
- ・クサラでの占領軍との衝突で、23人が負傷した。

9月17日

- ・占領軍は、ヌール・シャムキャンプの青年を逮捕した。
- ・占領当局は、エルサレムの新たな入植地計画を承認した。
- ・占領軍は、ジャバリアの東で市民を逮捕した。
- ・占領軍はアルーツワナの入植者の犯罪に対する座り込みを弾圧。

9月18日

- ・占領軍は、軍事検問所で、ジェニンキャンプの釈放された獄中者を逮捕した。
- ・一週間前の出来事で、占領軍は、ハワラ近くでの銃撃攻撃の容疑者を逮捕したと主張。
- ・占領軍は、ハマスの指導者部デルハレーク・アルナツシエの家を急襲し、逮捕の脅しをかけた。
- ・ヘブロンで、入植者たちが、家を攻撃し、車の窓を割った。
- ・占領軍は、アルーツルの町の2人の青年を逮捕。
- ・占領軍は、アボウド近くの2人の青年を逮捕。
- ・占領軍は、フェイスブックへの投稿で、市民を逮捕した。
- ・イスラエルはISに所属している容疑の300人の監視を強化。

9月19日

- ・ハワラの入植者の車に銃撃
- ・エルサレムの学校で、イスラエルのカリキュラムを拒否する全面ストが行われている。
- ・ハワラで、入植者たちの攻撃によって、6人が負傷。
- ・シンベトは、イスラエル内で攻撃を計画していた細胞を暴いた
- ・ベイト・ウマルの衝突で、窒息者

9月20日

- ・エスカレーションはピークに達している。占領軍は、北部西岸に大規模侵攻をしようとしている。
- ・ビッド町の衝突で、イスラエル兵が負傷した。
- ・民衆は、ナブルスでの事件を非難し、自治政府に全面的な責任があると主張。

- ・西岸とエルサレムでの逮捕キャンペーン
- ・イスラエルの裁判所は、アルーブラク壁の近くで入植者がラッパを吹くことを許可した。
- ・ナブススの抗議で一人死亡、負傷者
- ・西岸とエルサレムで逮捕キャンペーン
- ・占領軍は、経済省の砂利検査官に催涙ガス弾を発射。
- ・ハーグ、アブアクレの暗殺の法的な提訴が国際刑事裁判所に行われた。

・独立委員会：我々はナブロスで起こったことをフォローしている。我々は即座の捜査を要求している。

- ・治安機関から声明—ナブルスで衝突が再開
- ・占領軍はサレム検問所が銃撃の対象になっていると主張。
- ・占領当局、ユダヤ教の休日に西岸とガザを閉鎖。
- ・ジェリコの南で、占領軍との衝突

9月21日

- ・ベイトウマルで。衝突で青年が逮捕され、窒息者がでた。
- ・入植者たちが牛飼いたちを追い回し、占領軍兵が、彼らの車を没収した。
- ・北部西岸の軍に向かった発砲
- ・占領下エルサレムのアルーツルで占領軍と衝突
- ・入植者たちは、北部西岸で武装民兵を組織した。
- ・8日前に逮捕した漁師を、占領当局は釈放
- ・ラマラの東で、占領当局は、2軒の家を取り壊した。
- ・西岸での逮捕キャンペーン。
- ・ナブススの事件での終わらせる合意に達した。。」

- ・ラマラとナブルスで学生を占領軍が標的にしたために、負傷者
- ・中国は、中東の新たな安全保障の枠組みを設立することを呼びかけた。

- ・3人の青年が逮捕された。入植者がエルサレム旧市街を行進した。
- ・アルーザウィアの町で、土地が更地にされ、オリブの木が根こそぎにされた。

- ・ルマナの衝突で2人の子供が銃撃され、数十人が窒息した。
- ・殉教者アルーハラクを殺したイスラエル警官の裁判が延期された。

9月22日

- ・ヘブロン、占領軍はタッフオ村を襲撃し、裁判所の判事を逮捕した。
- ・占領警察は、休日の間警戒態勢を強化
- ・ヘブロン南部で占領当局は家を取り壊した。
- ・シリワンの女性を逮捕、過激派ベングビールがアルアクサを急襲。
- ・入植者たちは、ヘブロンで、選挙の準備で星アルーシャリフへの入り口に鉄の門を取り付けた。
- ・ベイト・ウマルで、占領軍の銃弾で3人が負傷一人は、障害のある青年。

- ・占領当局は、エフラト入植地への銃撃の容疑で、4人のパレスチナ人を逮捕したと主張。

- ・占領当局は、釈放された獄中者への旅行禁止を更新し、エルサレム市民の女性をアルアクサから追放した。

- ・ラマラ近くで、刺殺攻撃で5人の入植者が負傷し、占領軍の銃撃で殉教者

9月23日

- ・アルーツルのムハマド・アブジュマが殉教
- ・占領当局は、西岸で銃撃作戦を行ったハマスの細胞を逮捕したと主張
- ・ヘブロン中央で、占領軍との衝突で、窒息者。
- ・カフル・カッダムでの占領軍との衝突で、子供を含む複数の実弾

オリーブの会通信 第25号(通巻31号)

による負傷者。

- ・ 占領軍はアルーツルの衝突で占領軍に少年が逮捕された。
- ・ 占領軍は、アルアクサモスクを出ようとした2人の少年を逮捕。
- ・ アルーツルの町で対峙が再開
- ・ 保健省：占領軍は、ヘブロン病院の内部にガス弾を発射した。

9月24日

- ・ アルーツルの町で、排水による集団的制裁、学校が閉鎖された。
- ・ 占領軍は、ナブルスとラマラで5人の青年を逮捕した。
- ・ エルサレムの東で、シュファット難民キャンプで衝突が起こった。
- ・ ヘブロンの南で、入植地に反対する軽道の占領軍の弾圧で負傷者。
- ・ ナブルス近くで市民が占領軍の銃弾で殺された。
- ・ アルーツルとシリワンで占領軍との衝突が起こった。
- ・ セバステリアの町で占領軍との対峙で、窒息者

9月25日

- ・ イスラエルほ150か所で、ネタニヤフに反対するデモ
- ・ ナブロスへの占領軍の襲撃で、青年が殺され、3人が負傷した。
- ・ 作戦を恐れて、占領警察は、入植者たちに武装するように呼び掛けた。
- ・ 占領軍は、エルサレムの市民たちを喚問し、追放した。
- ・ 439人の入植者たちがアルアクサを蹂躪した。
- ・ 数日間で、4回、北部ネゲブで、入植地へ銃撃があった。
- ・ ナビサレに入り口で占領軍との衝突
- ・ アカバト・ジャバルキャンプの警察本部へ火炎瓶を投げつけたことで人々が逮捕された。
- ・ 占領軍は、アルビレで青年を逮捕した。

9月26日

- ・ アルーツルとシリワンの町で衝突
- ・ ジェニン地区のアルージャラマ検問所の近くで二つの爆発物がなげつけられた
- ・ ヘブライ語チャンネル：ナブルスの入植地に向かって銃撃と主張
- ・ ユダヤ教の休日のため、占領軍はイブラヒムモスクを閉鎖した。
- ・ アルアクサへの襲撃の間、2人が負傷し、5人が拘束された。
- ・ 入植者の侵攻と祝贺を保証するために、旧市街とアルアクサは孤立させられている。

9月27日

- ・ 占領軍は、アルーツルで5人のエルサレム市民を逮捕した。
- ・ 制限の中、入植者たちは、アルアクサを襲撃した。
- ・ 占領軍は、エルサレムの青年を逮捕し、ほかの人をアルアクサモスクから追放した。
- ・ 占領軍は、アルーサモウの市民を逮捕し、彼の車を押収した。

9月28日

- ・ エルサレム近隣と町で、夜の対峙
- ・ イスラエルは、西岸とガザの閉鎖を解除した。
- ・ 占領軍は、ガザから泳いで、海上国境に向かっていた青年を逮捕。
- ・ ナブルスの南と西での衝突で、2人のジャーナリストが負傷し、青年が逮捕された。
- ・ 占領軍は、エルサレムのアルーツルの2人の少女を逮捕した。
- ・ ナブルスの南で、入植者の攻撃で2人が負傷し、2人の青年が逮捕された。
- ・ アルービレ、占領軍との衝突で、青年が銃撃された。
- ・ アルービレの北の入り口で、占領軍との衝突で、2人が重傷
- ・ 三日目、エルサレム市での対峙
- ・ ジェニンーナブロス道路で、入植者たちが車に投石
- ・ 占領当局は、西岸で空軍を使った暗殺の履行を承認した。

・ ベイト・ウマールの衝突で、実弾で2人が負傷した。占領軍は、アルーアロウブキャンプを襲撃。

・ 占領軍は、アルーツルで逮捕されたエルサレム市民の子供の両親が逮捕された。

・ 西岸の諸都市での占領軍のエスカレートで、逮捕者と数十人の負傷者。

・ ベツレヘムの南、アルーハデールで、の衝突で窒息者

9月29日

・ 一人の入植者が負傷、占領軍の大規模部隊が、フサンを襲撃

・ 占領軍は、レバノン国境を越えた2人を逮捕した。

・ 占領軍は、ベツレヘムの4軒の家を取り壊した。

・ ジェニンでゼネスト

・ 西岸での逮捕、デユラで占領軍は3人の市民を負傷させた。

・ 占領軍は、ベツレヘムの南のアルタスの村で家を取り壊した。

・ ツクで占領軍に追跡されたあと子供が殺された。

・ 入植者たちがキサン市の市民の土地にオリーブの木を植えている。

・ ヘブロンで、ジェニンでの占領軍の犯罪に反対し、ハンストの獄中者の支援のための座り込みが行われた。

・ イスラエル軍は、ビルゼイト大学のハマスの細胞を逮捕した9月30日

・ ナザレ、イスラエル警察の銃弾で、青年が殺され、他が負傷した。

・ 数百人の宗教的ユダヤ人が徴兵に反対してデモを行った。

・ ジャラズンで、占領軍の車への発砲で、2人の青年が負傷した。

・ 30人の行政勾留の獄中者、無期限ハンストの6日目に入った。

・ 占領軍は、カフル・アルラバドを襲撃し、考古学的場所の写真をとった。

・ 占領軍は、ベイト・ウマールで釈放された2人の獄中者を逮捕した。

・ ベイト・ダジャンで、入植地に反対する行進の弾圧で、負傷者。

・ カフル・カッドムの行進の占領軍の弾圧で、7人が負傷した・サルフィットの西で、入植者が、オリーブの木を伐採。

・ 入植者たちは、北部ヨルダン渓谷のカレット・マクホールを襲撃した。

・ アルアクサから出たところで、エルサレムの活動家が逮捕された。

・ アイダアンプの占領軍との衝突で、負傷者

・ 占領軍は、ガザとの分離壁を越そうとしたパレスチナ人を逮捕。

10月1日

・ ベイト・ウマールの入り口の占領軍の場所が火炎瓶で燃やされた

・ マサフェール・ヤッタの反入植地行進の弾圧と市民の逮捕

・ ベツレヘムとヘブロンで占領軍は、子供を含む7人を逮捕した。

・ ジャラズンキャンプで、占領軍は、市民を逮捕し、金を没収した。

・ ベツレヘムの東で、占領軍との衝突で、窒息による負傷者。

・ エルサレムのシュファットキャンプの学校の学生にパレスチナのカリキュラムを配布した。

10月2日

・ 3人、ゴランのイスラエル軍事基地へ侵入した3人が逮捕された。

・ 過激派、ベン・グフィールがシェイク・ジャラ近隣に押し入った。

・ ナブルスの東で、バスへ銃撃で入植者一人が負傷。

・ アルコッツ大学の付近での占領軍との衝突で負傷者

・ ナブルスの市で、入植者たちが、市民の車を攻撃。

・ 西岸とエルサレムで、逮捕者

・ ラモン刑務所で、イスラエルの女性兵士が、刺された。

・ 占領軍は、エルサレムの子供を逮捕した。

・ イタマールの入植地の近くで銃撃により、イスラエル軍兵士負傷。

10月3日

- ・ジャラズウンキャンプで占領軍の銃撃で、2人の運強者
 - ・対峙—占領軍は西岸で16人の市民を逮捕した。
 - ・入植地を除くため、占領当局は、欧州との合意を批准しなかった。
 - ・占領当局は、207回目のネゲブのアルキブ村の取り壊しを行った。
 - ・ツクの学生の行進の弾圧で、子供が負傷した。
 - ・ヘブロンで、占領当局はいくつかの道路を封鎖した、
 - ・入植者たちが、テコアで、暴動。
 - ・イスラエルの特殊部隊が、デヘイシャキャンプから青年を誘拐。
- 10月4日
- ・アルービレの北で、衝突で占領軍の銃弾で、3人負傷。
 - ・ナブルスに南で、入植者たちの攻撃で、6人が負傷した。
 - ・ジャラマ検問小児爆発物が投げられ、攻撃者は逃走した。
 - ・西岸での複数の逮捕
 - ・入植者たちは、ナブルスの学校を攻撃し、衝突と負傷者・
 - ・ベイタで占領軍との衝突で、30人が負傷した。
 - ・占領軍は、シリワンのラス・アルアムドで子供を逮捕した。
 - ・占領軍は、ツクの町を襲撃した。
 - ・襲撃の準備のため、占領当局は、礼拝者がイブラヒモスクに到達するのを妨害した。
 - ・入植者たちは、アルアクサを襲撃し、バブ・アルラハマ墓地でラツパを吹いた。
 - ・占領軍は、ライオンズ・デンの活動家の一人を逮捕した主張
 - ・ラマラ近くでの銃撃でイスラエルの警官が負傷した。
- 10月5日
- ・占領軍は、エルサレムの若者を逮捕した。
 - ・占領軍は、シリワンのエルサレム知事も家を急襲した。
 - ・336人の入植者がアルアクサを急襲し、公園で逮捕者。
 - ・アイトキブル—アルアクサの冒険、エルサレムの孤立化
 - ・アルービレで占領軍は、金属弾で子供を負傷させた。
 - ・ヘブロンで占領軍は、学生を攻撃し、負傷者。
 - ・デイル・アルハタブの家の包囲で、殉教者と負傷者。
- 10月6日
- ・ベイトエイノウン交差点で衝突が起こった。
 - ・ヨームキブルで過激派数十人がテルアビブで5人の市民を殺害。
 - ・ツクの男子校に、占領軍は、催涙ガスを発射した。
 - ・占領軍は7人の市民を逮捕した。
 - ・占領軍は、2人のエルサレム子供を逮捕した。
 - ・占領当局は、ガンにかかっている獄中者アブハミドの早期の釈放を求める要求を拒否した。
 - ・ベイト・ウマールで実弾で青年が負傷した。
- 10月7日
- ・ハルフルの預言者ユヌスモスクの付近を入植者たちは、襲撃した。
 - ・占領軍は、ツクの町で、逮捕と捜索のキャンペーンを開始した。
 - ・占領軍はナブルスの市民を逮捕した。
 - ・カルキリヤで占領軍によって少年が重傷を負わされた。
 - ・カフル・カッダムの行進の弾圧で、占領軍の銃弾で13人が負傷。
 - ・ベイタの町で、占領軍との衝突で窒息者
 - ・ジェニンキャンプでの占領軍との衝突で、2人が殉教し、11人が負傷した。
 - ・30人の行政勾留の獄中者が無期限のハンストを続けている。
 - ・3人負傷。占領軍は、ジェニンの家を包囲し、抵抗戦士は反撃した。
 - ・ラマラ近くの検問所で、トルカレムの3人の青年が逮捕された。
- 10月8日

- ・ナブルスの南西での衝突で、窒息者
 - ・エルサレムで、イスラエルの警官が負傷した。
 - ・ジェニンで、占領軍は、釈放された獄中者アブザイナを逮捕し、イスラエル兵が負傷したことを確認した。
- 10月9日
- ・シュファット検問所で、銃撃で3人の兵士が負傷。その後、攻撃者車で攻撃しようとした。
 - ・エルサレムで、負傷者と逮捕者。シュファット作戦の容疑者の捜索が継続している。
 - ・10万人のパレスチナ人が孤立化、占領軍による全面的なシュファット難民キャンプとアナタの町の喘鳴的な封鎖。
 - ・ナブルスの南のハワラ検問所を占領軍が閉鎖。
 - ・占領軍は、エルサレムの銃撃攻撃で兵士が負傷していたのが死亡と発表。
 - ・シュファットキャンプでの暴力的な衝突、包囲の継続と嫌がらせ。
 - ・西岸のいくつかのエリアで、入植者たちが市民の車を攻撃した。
 - ・占領軍はエルサレムの北東のアナタを襲撃し、監視カメラの記録を押収した。
 - ・シュファットキャンプで10人が逮捕され、対峙と包囲が続く
 - ・エルサレムとエルサレムで警戒態勢が続く、シュファットの包囲が続く
 - ・シリワンで、夜の対峙
 - ・包囲と対峙、シュファットとアナタキャンプの学校が休校
 - ・ラマラの北西、アブシケイヂムの家が占領軍に包囲された。釈放された獄中者が逮捕された。
- 10月10日
- ・3人の若者がアルアクサで逮捕された。
 - ・エルサレムの旧市の通りを数百人の入植者たちが行進した。
 - ・ライオンズ・デン：我々は、ナブルスの北西で衝突している。
 - ・シュファット包囲が続く、エルサレムと西岸で警戒態勢
- 10月11日
- ・サルフィットでの入植者たちの攻撃で、農民が負傷した。
 - ・278人の入植者たちが、シュコットの一目目で、アルアクサを襲撃した。
 - ・イスラエルは、攻撃者が、西岸に逃げようとしている。11人の彼の親族と援助者を逮捕した。
 - ・ヘブロンで、獄中者アブハミドと病気の獄中者とハンストの獄中者に連帯するスタンディングが行われた。
 - ・アルーシュハダ通りで、入植者たちの催涙ガスのスプレーで、8人が呼吸困難になった。
 - ・入植者の攻撃のエスカレーションへのオリーブ農民の恐れは増大している。
 - ・アルアクサで礼拝者の逮捕と制限、1032人の入植者たちが蹂躪・ベツレヘムの南のソロモンのプールを入植者たちが急襲した。
 - ・アルアクサの門で、パレスチナ人への攻撃と逮捕
 - ・シュファットキャンプで対峙と包囲が続いている。タミミの家が襲われ、計測が行われた。
 - ・占領軍は、エルサレムのシュファットキャンプで、青年を逮捕した。
 - ・アルジェリアで、パレスチナの対話が行われている。
 - ・作戦の後でバリケードが閉じられた。ナブルスの南で入植者が銃撃で負傷した。
 - ・ナブルスの南で、入植者たちが市民の車を攻撃した。
 - ・北部ヨルダン渓谷でも入植者たちは、道をブロックし、市民の車

を攻撃した。

・シュファットキャンプの住人たちは、市民不服従を宣言。暴力的な対峙が起こっている。

・トルカラムの南東で、占領軍は、ブルドーザーと二台のトラックを押収した。

・ベイトハニナで住宅のビルを襲撃

・占領軍は、ヘブロン南、ゼノタの村を急襲した。

10月12日

・ヘブロンで、アルーラマの井戸を入植者たちが襲ったあと、占領軍との衝突があった。

・西岸はシュファットキャンプのために全面ストを宣言した。

・2日目、アルアクサへ入ることが制限され、ゲートで入植者たち祈りを行っている。

・シュファットキャンプとアナタキャンプへの封鎖に攻撃して、エルサレムの学校でストが行われた。

・ラマラへの入り口にバリヤーを置き、占領軍は、ナブルスに封鎖を行った。

・3人の子供を含む、西岸での逮捕キャンペーンが行われた。

・市民不服従で、エルサレムで商業施設、教育機関でストライキが行われた。



母がパンを焼くのが恋しい

そしてお母さんのコーヒー

私の母の タッチ...

幼少期は成長する

日々

そして、私は自分の人生を愛しています。

もし私が死んだら、

お母さんの涙を恥じ入るだろう！

戻ってきたら連れて行って

あなたの裾のスカーフ

そして私の骨を草で覆う

あなたのかかとを清めたものの洗礼を受けなさい

締め付ける..

髪の毛のロック..

ドレスの尻尾になびく糸で..

神になれますように

神は私になります..

心に響いたら！

私が戻ってこないなら、私を降ろしてください

あなたの火に油をそそいで..

そしてあなたの屋根の物干し

立ちっぱなしだったから

あなたの昼の祈りがなければ

私は年をとり、ひとりの子供時代のスターです

わたしが加わるまで

ひな鳥

裏道..

待っていてください

おいしいパレスチナ キドレ

パレスチナの都市ヘブロンを代表する料理、キドレは、柔らかい骨付きラム肉と香り高いスパイスの効いた米がたっぷり入っています。

キドレはパレスチナの都市ヘブロンを代表的な料理です。qidrehという言葉は「鍋」という意味で、この料理が作られる銅製の容器を指しています。しかし、家庭で調理されることはほとんどない。肉を茹でたり、ご飯を炊いたりして、最初の準備は家の中で行うが、その後、専用の銅鍋で近所の薪釜に送られ、そこで完全に調理される。

盛り付けは、プレーンヨーグルトとパレスチナのサラダを添えれば、濃厚な味わいと対照的に、さっぱりとした味わいになります。

材料

レシピを保存

子羊のスープを作る。

エクストラバージンオリーブオイル 大さじ3杯 (45ml)

骨付きラムのすね肉または肩ロース肉 6ポンド (2.7kg) (すね肉小4~6本、肩ロース肉8本程度。)

カルダモンのさや (軽く割ったもの) 4個

ローリエの葉 2枚

オールスパイス (挽き割り) 小さじ1

シナモン 小さじ1/2

挽きたての黒胡椒 小さじ1/2

挽いたコリアンダーシード 小さじ1/2

挽いたクミン 小さじ1/2

ターメリック 小さじ1/2

黄色いタマネギ (皮をむいて丸ごと) 大1個 (10オンス、283g 水2クォート (1.9L))

ダイヤモンド・クリスタル社製コーシャーソルト 大さじ1 (9g)、食卓塩や上質の海塩の場合は、半分量または同じ重さ

米の場合

エクストラバージンオリーブオイル 大さじ2 (30ml)

無塩バター 大さじ2 (30g)

黄タマネギ (半分に切って薄くスライス) 大1個 (10オンス、283g)

皮をむいたニンニク (中) 15片 (約1.3/4オンス、50g)

ダイヤモンド・クリスタル社のコーシャーソルト小さじ2 (6g)、ター



ブルソルトまたはファインシーソルトの場合は、使用量の半分または同じ重さ

1 小さじ 1 挽いたクミン

オールスパイス (挽き割り) 小さじ1/4

シナモン 小さじ1/4

挽きたての黒胡椒 小さじ1/4

挽いたコリアンダーシード 小さじ1/4

ターメリック 小さじ1

ジャスミンライスまたはカルローズライス 1ポンド2オンス (500g) (2/3カップ分)。

水切りして洗ったひよこ豆の缶詰 (425g) 1個分

盛り付けをする。

軽くトーストしたスライスアーモンド (100g) 1カップ

平葉パセリのみじん切り (飾り用)

プレーンヨーグルト

作り方

ラムスープを作る。7~8リットルのダッチオーブンまたは鍋にオリーブオイルを入れ、中火で煙が出ない程度に熱する。ラム肉を入れ、時々裏返ししながら、片面4分ずつ、全体に焼き色がつくまで焼く。ラム肉はすべて鍋に戻す。

カルダモン、ローリエ、オールスパイス、シナモン、ブラックペッパー、コリアンダーシード、クミン、ターメリック、玉ねぎを加え、さらに水と塩を加える。強火で沸騰させ、沸騰した泡を取り除き、弱火にしてラム肉が柔らかくなるまで約2時間煮込む。火から下ろし、大きめの耐熱ボウルに網目の細かいこし器をセットし、ラムスープを漉す。玉ねぎ、ローリエ、カルダモンポッドは捨てる。ラム肉を大皿に移し、脇に置く。

守ろう！オリーブの木を カンバのお願い



オリーブ畑再生基金の目的

土地を守ることは抵抗闘争である。パレスチナの農民の土地を守る闘い、生活を守る闘いを支援します。集まった基金は、パレスチナ農業労働委員会連合 (UAWC) に送ります。

郵便振替

記号番号：00960-2-303500番

名称：オリーブの会 (オリーブノカイ)

他行等から振り込む場合

店名 (店番)：〇九九店 (099)

預金種目：当座

口座番号0303500



イスラエルの新聞ハーレツは、ワールドカップの眞の勝者はパレスチナだと伝えた



12月20日イスラエルのネグレクトにより、アブハミドさんは獄死した。



ベツレヘムで、クリスマスツリーの準備が行われた。

今号の内容

新政府の誕生はパレスチナとの対立を激化させる・・・1

第五回選挙、もっと赤裸々に・・・3

ベン・グビエール。・・・4

食料・・・7

アルジェリアサミットとパレスチナ・・・9

パレスチナ日誌・・・11

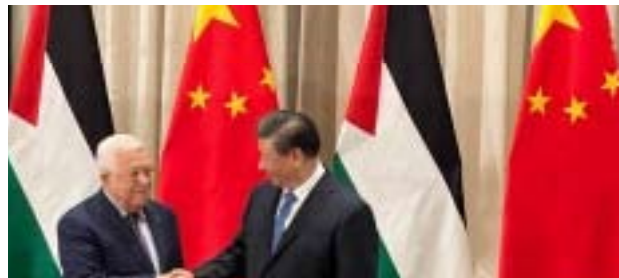
パレスチナの愛した歌・・・14

おいしいパレスチナー・・・15

トピック・・・16



12月9日アブホウリ博士は、日本大使とキャンプの難民の状況、UNRWA への支援について話し合った。



12月9日中国の周主席は、パレスチナの国連への完全な加盟を支持することを再確認した。



12月18日、占領当局は、行政拘留されていたエルサレムの弁護士、サラハ・アルハモウリさんをパリに追放した。彼は、フランスとの二重国籍を持っていた。これは、国際法に反する行為である。